

第1章 東御市の概要

1. 自然的環境

(1) 位置・気候

本市は長野県の東部に位置する東信地域に属している。

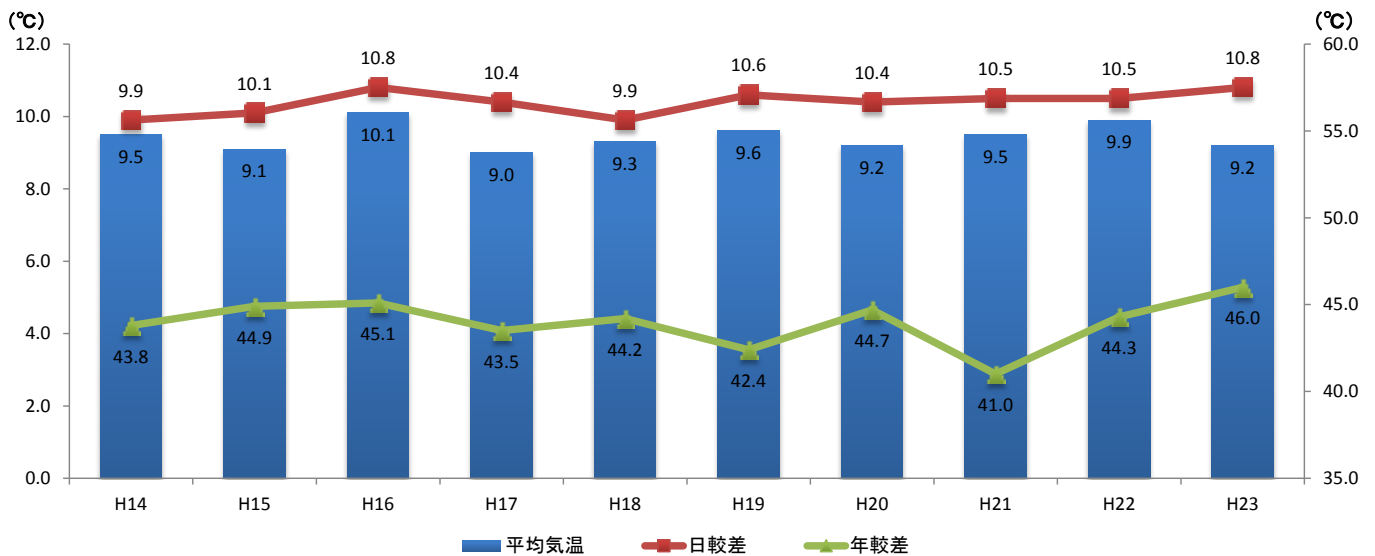
気候については、準高原的な内陸型の気候風土にあり、年平均気温は約9℃～約10℃と冷涼で、気温の日較差は約10℃～約11度、年較差は約41℃～約46℃と大きい（平成14～23年平均）。

また、年間平均降水量(昭和56年～平成22年)は約980mmと、長野県の中でも少雨の地域となっている。

そのため、古来より水不足に悩まされており、各地に農業用ため池が散在している。

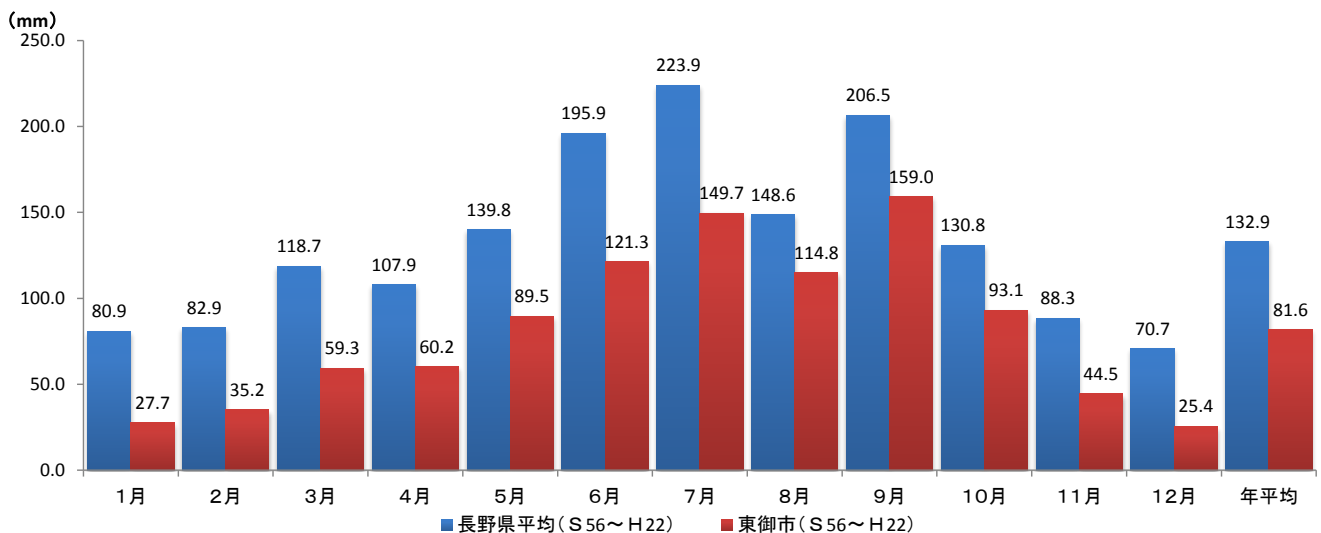


図：東御市の位置



図：気温の年較差（H14～H23）

(出典：気象庁)



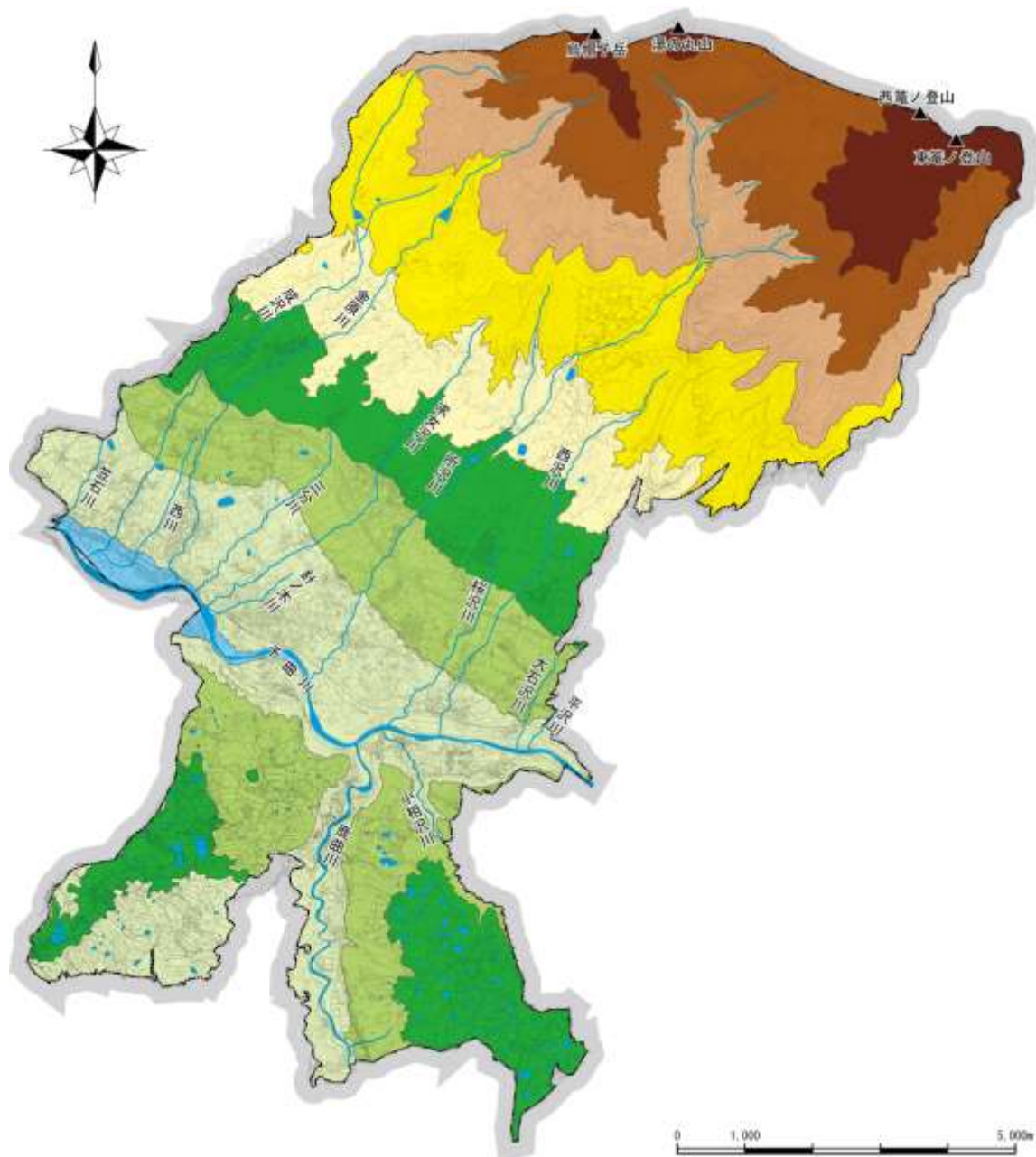
図：月別平均降水量（S56～H22）

(出典：気象庁)

(2) 河川・地形

本市の東西を横断するように千曲川が流れ、その北側には、東麓ノ登山(2,227m)・西麓ノ登山(2,212m)・三方ヶ峰(2,040m)・湯の丸山(2,105m)・烏帽子岳(2,065m)と、2,000mを越す山々が連なり、そこから流れ下る大石沢川・所沢川・三分川・金原川・成沢川の主要河川をはじめ、何本もの小河川によって形成された押し出し扇状地が複雑に重なり合い、北東から南西に傾斜する地形が形成されている。扇状地部分では、湧水など豊かな水系を利用して水田化が進められ、その他の水田化の困難な地域では、火山性の土壌(黒ボク)を活かし、ブドウ・りんご・クルミなどの果樹園芸が盛んに行われている。また、高地では高原野菜栽培も行われている。

一方、千曲川の南側は、浅間山(2,568m)・蓼科山(2,530m)を眼前に見ることができ、浅間火山の泥流地を侵食した千曲川に沿う低地と、蓼科火山の泥流でできた台地により形成されている。台地部分は中央を侵食する形で流れる鹿曲川を境に、東に御牧原台地・西に八重原台地が広がり、平安時代から朝廷に名馬を献上する御牧として、古くは馬の飼育が盛んに行われていたが、近世以降、水田化が進められた。



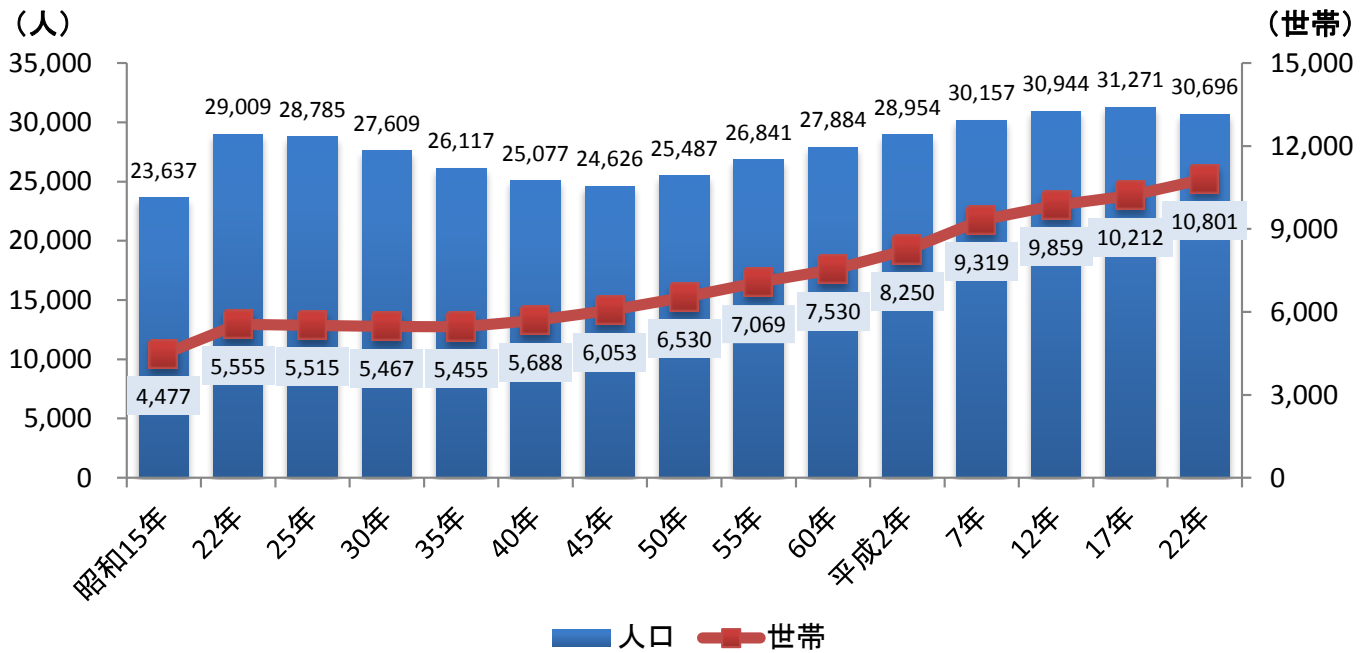
図：東御市の標高、河川・水路・ため池位置図

2. 社会的環境

(1) 人口

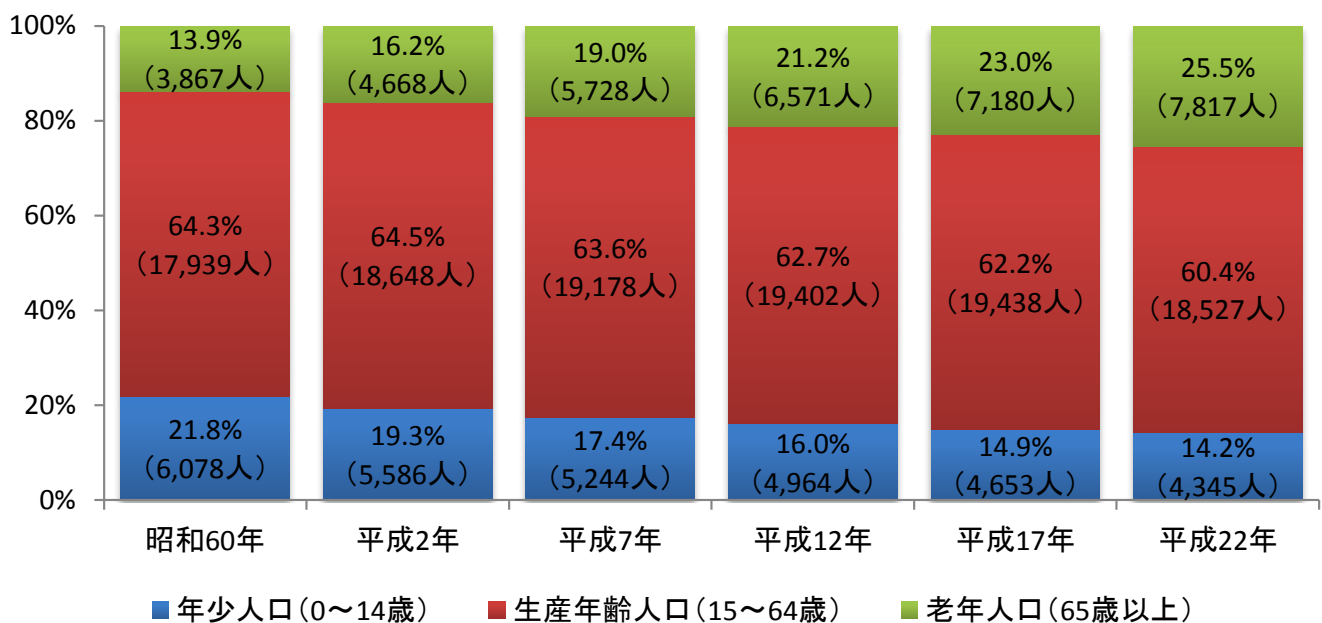
本市の人口は、昭和45年（1970）以降増加傾向にあったが、近年は減少傾向がみられ、平成22年現在で30,696人となっている。

年齢3区分別人口を見ると、0～14歳の年少人口は平成22年現在で14.2%（4,345人）と減少傾向となっている。一方、15～64歳の生産年齢人口は平成22年現在で60.4%（18,527人）と、わずかに減少傾向となっている。さらに65歳以上の高齢者人口は平成22年現在で25.5%（7,817人）と増加傾向となっており、少子高齢化が進んでいる。



図：人口総数の推移

(出典：国勢調査)

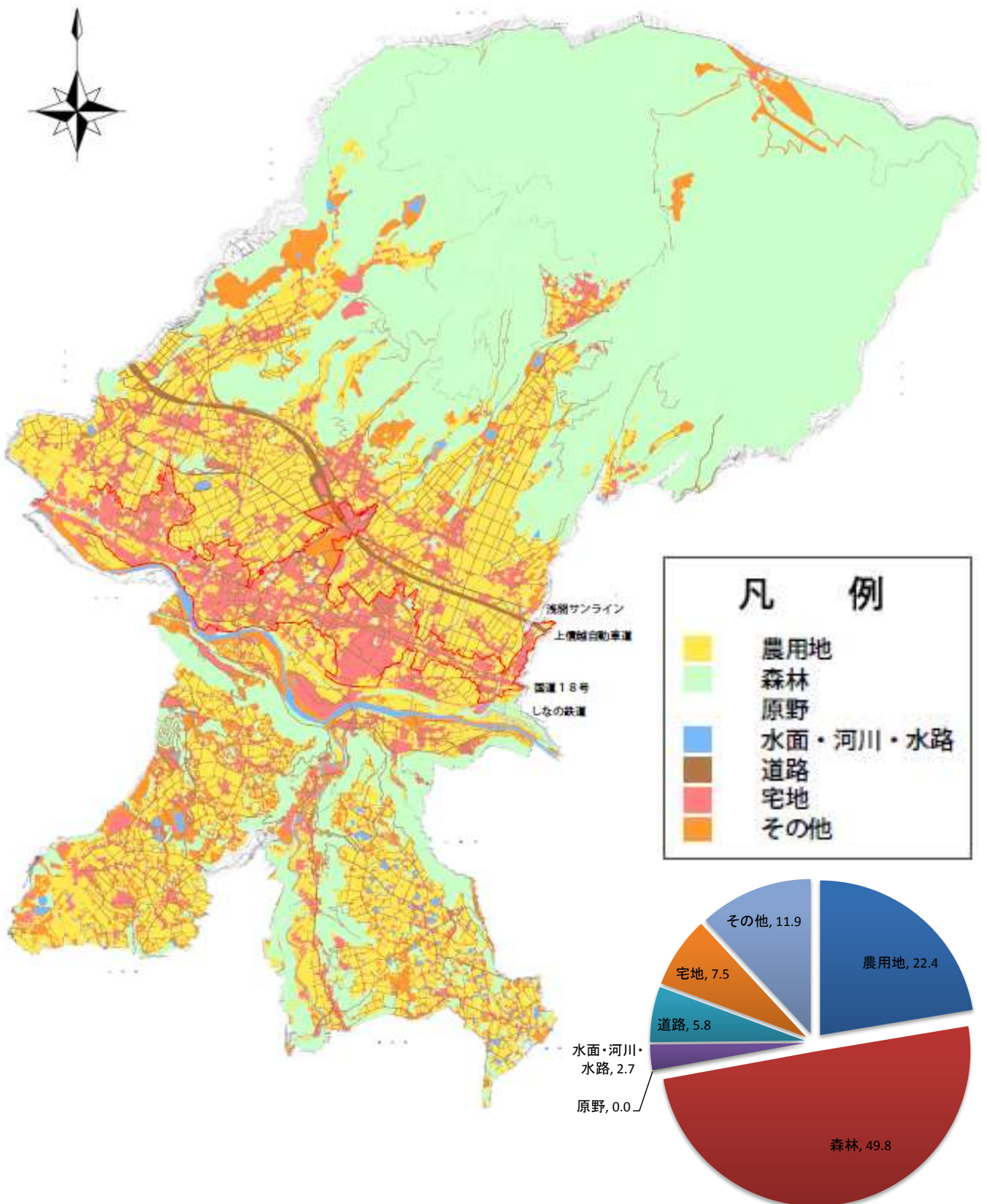


図：年齢3区分別割合（人口）の推移

(出典：国勢調査)

(2) 土地利用

都市計画区域外のほぼ全域を山林が占めており、市の北側は上信越高原国立公園、南側は八ヶ岳中信高原国立公園に指定され、良好な自然環境が保たれている。土地利用を見ると、市全域の約5割を森林が占め、次いで農用地（約22%）、宅地（約7%）、道路（約6%）となっている。



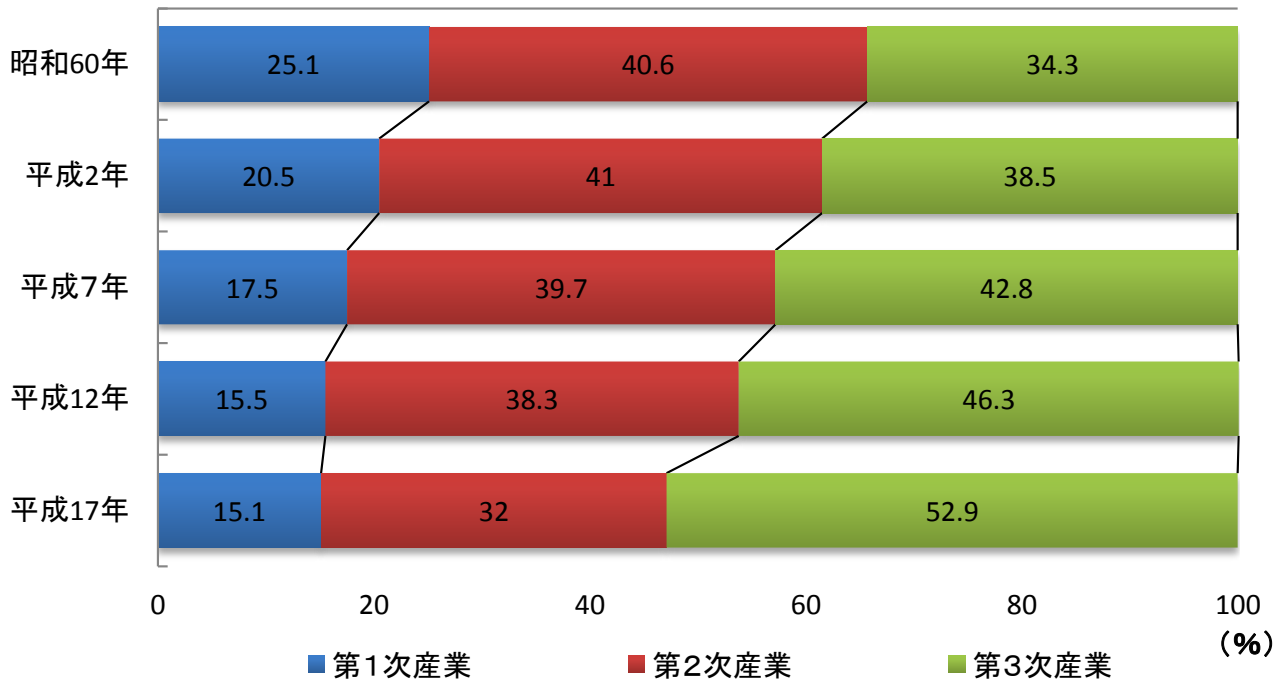
図：土地利用現況図

(出典：平成17年都市計画基礎調査)

(3) 産業・交通

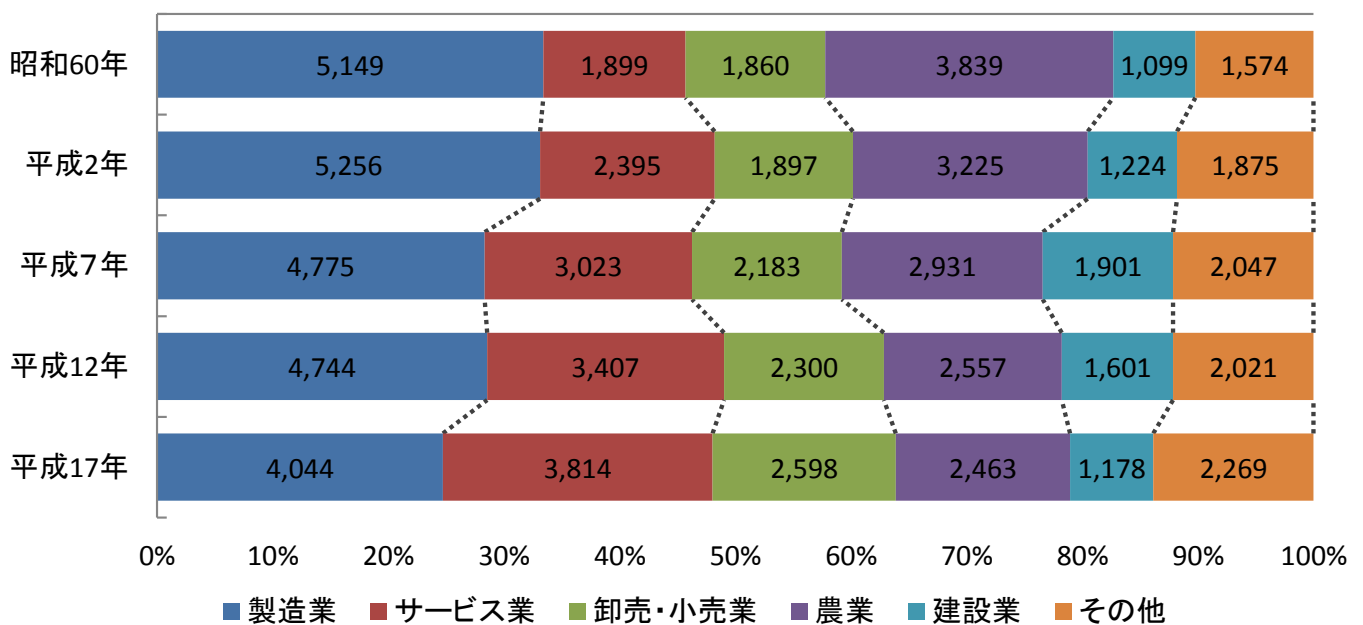
産業については、就業人口は全体で増加傾向にあるが、第1次・2次産業は減少傾向、第3次産業は増加傾向となっている。また、産業大分類別人口のうち、おもな業種を見ていくと、製造業、サービス業、卸売・小売業の3業種を中心に発展してきた中で、特にサービス業と卸売・小売業の就業者数は増加傾向にある。

交通については、国道18号や浅間サンライン、上信越自動車道、長野新幹線などの交通利便性が向上したことに加え、上田市・佐久市・小諸市の中間地点に立地していることから、幹線道路沿い及び東部湯の丸インターチェンジを中心に店舗の出店が進み、市の中心市街地商店街の活性化と併せたハード、ソフトの両面からの整備が進められている。



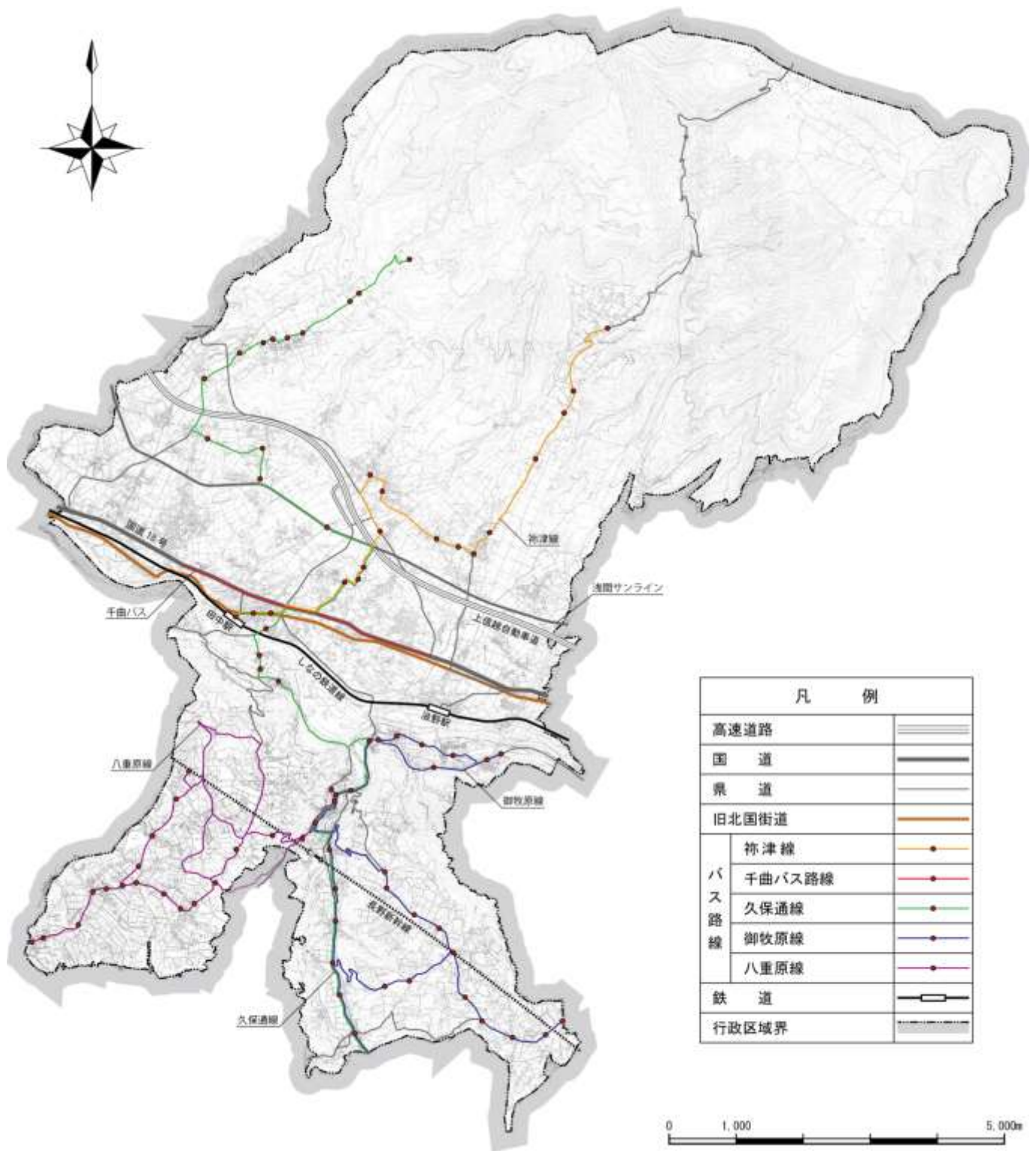
図：産業別就業人口割合の推移

(出典：国勢調査)



図：産業大分類別人口の推移

(出典：国勢調査)



図：市内の交通網（主要幹線道路、バス路線、鉄道）

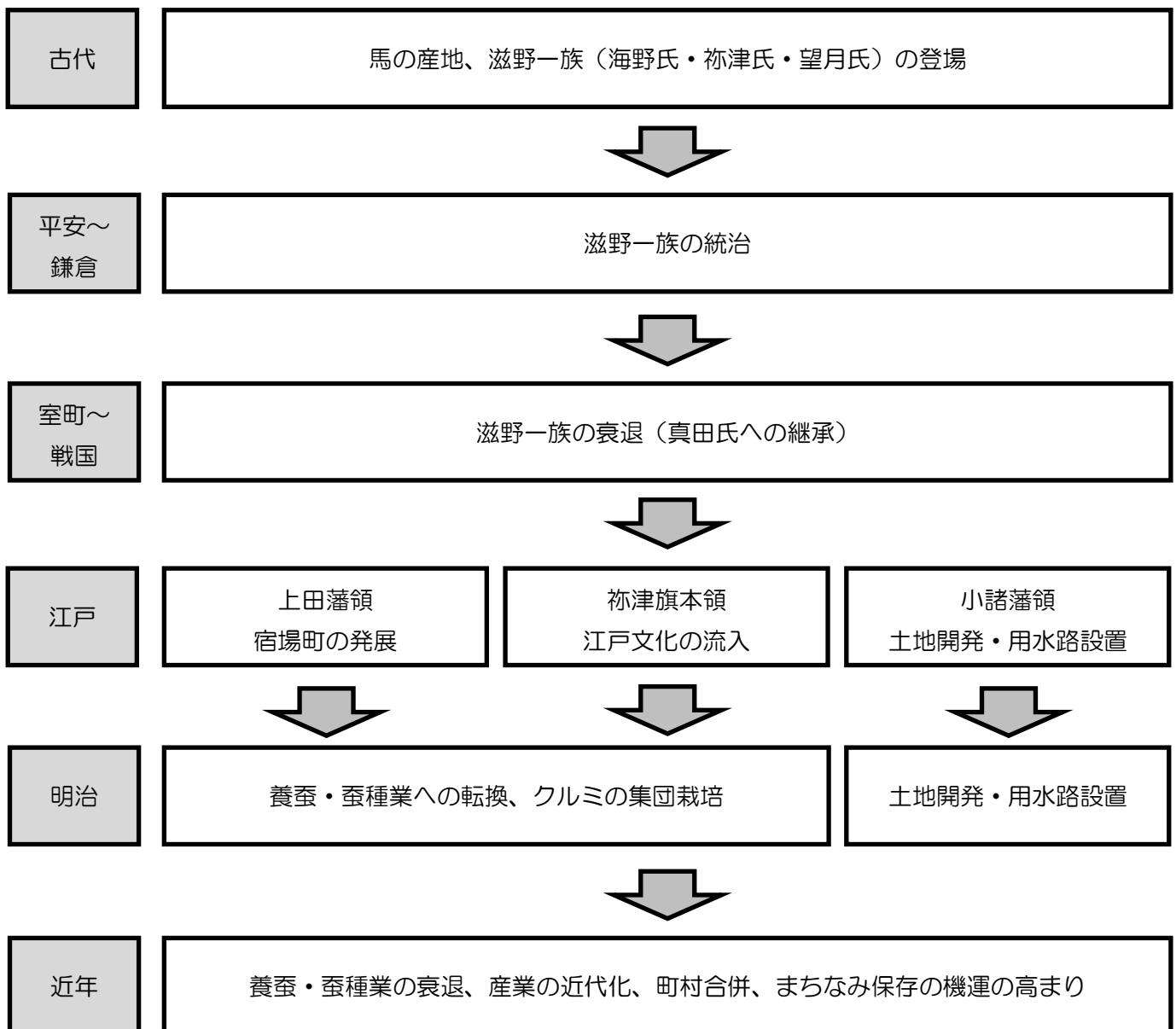
3. 東御市の成り立ち

今日の東御市は、平成16年（2004）4月に小県郡東部町と北佐久郡北御牧村の2町村が合併して誕生した。

合併して間もない新しい市であるが、その歴史を見ていくと、東御市を中心とした地域一帯は、平安時代は高低差のある地形を生かし名馬の産地として栄え、中世には信濃武士の中核として成長していった滋野一族（海野氏、祢津氏、望月氏）が活躍し、戦国時代には海野氏の系を引く真田氏が名将・武田信玄の臣下として目覚ましい活躍を見せていた。さらに、江戸時代は街道の整備により海野宿・田中宿を中心に、多くの人が行きかう宿場町として発展し、明治時代以降になると、鉄道や道路整備をはじめとした近代化が進む中で、養蚕業・蚕種業が盛んになり、さらに北御牧地域では高原地域の土地開発が進められ、農業・果樹園芸が盛んに行われるようになった。

このように東御市は、さまざまな歴史的要素が重層的に積み重なった地域であるといえる。

■歴史の流れイメージ



(1) 旧石器時代～古墳時代

①ムラの発生と馬の飼育

東御市周辺（東部地域・北御牧地域）では、旧石器時代より人々が生活をはじめ、東部地域においては、史跡「成立石器時代住居跡」に代表されるように、烏帽子山麓の南側斜面に縄文時代からの人々の生活の跡が確認されている。さらに、弥生時代から古墳時代にかけては、湧水などを利用した稲作が千曲川の段丘面に始まり、扇状地や山裾にまで及んでいた。

一方、北御牧地域においても、残されている縄文時代の遺跡から、八重原台地と御牧原台地で生活が営まれていたと考えられているが、地形が険しく、鹿曲川下流の地域のごく限られた土地でしか水田耕作ができず、森林原野の未開の土地がほとんどであった。古墳時代の遺跡も、「君塚古墳」と「部屋田部古墳」の2基しか確認されていないことから、東部地域に比べ、生活範囲は限られたものであったと考えられている。

その他、この時代の特筆すべき点として、馬の飼育が挙げられる。東御市周辺には、「杏葉等」の馬具に関連した遺物が副葬されている古墳が数多くみられ、既にこの頃から、自然の利を生かして馬の飼育が行われていたと考えられている。やがて、馬飼の一族から、地域を治める豪族が派生していった。



写真：杏葉等



写真：成立石器時代住居跡

②ヤマト政権による地方統治と海野の起源

ヤマト政権による地方統治が進められる中で、東御市周辺は、大和から信濃・東北地方にまで通じていたと考えられている「古東山道」が隣接しており、ヤマト政権にとって、東北の蝦夷を制圧する上での交通上の要衝の地域とみなされていた。

ヤマト政権の支配下に置かれると、古くから馬の飼育が盛んに行われていたこともあり、「屯倉」（朝廷の直轄領）が置かれ、律令が整うと「御牧」（朝廷の料馬を飼育する牧、勅使牧とも言う）が設置され、五畿七道の1つ「東山道」が整備されてからは、都との交流を深めていくこととなった。

東御市の「海野」は、正倉院御物の中に「信濃国小県郡海野郷戸主爪工部君調」と墨書された麻紐が所蔵されていることから、この頃にまでさかのぼる地名である。加えて、爪工部（貴人に献上された衣笠や鬘、御座を奉飾する職業人）という、国司に直属する特別の職務を勤めていた百済からの渡来人の系譜を引く一族が住み、この地域は朝廷とかなり強いつながりを持っていた地と考えられている。

古代の東御市周辺が重要な場所であったことを象徴する遺跡として、現在の海野地域の河岸段丘上に位置する「中曽根親王塚古墳」が挙げられる。東日本では希少な方墳で、かつその規模も大きいことから、東信濃を治めたであろう土豪又は中央政権の地方統率の中で進出してきた有力豪族に繋がる権威者の墳墓とも推定されている。

平安初期に成立した日本最古の仏教説話集「日本霊異記」には、「大伴連忍勝なる人物が童女郷（海野地域を中心とする一帯）に氏寺を建立した」という記述がみられることから、中央政権による地方統治が進む中で、大伴氏のような有力豪族の一族が海野地域一帯に根付いたと考えられている。

その他、日本武尊を祀る海野の「白鳥神社」や、隣接する佐久市望月の「大伴神社」についても、朝廷の東征を指揮した大伴氏一族の影響を示すという見方もある。



写真：正倉院の御物にあった麻織物の紐の芯



写真：中曽根親王塚

(2) 奈良時代～平安時代

① 牧の経営と滋野一族（海野・祢津・望月）の登場

広大な原野に山・谷・河と緩傾斜の多い地形、冷涼で乾燥している気候風土など、馬の飼育に適した環境が整っていたことから、大和朝廷が信濃（現在の長野県）に設置した16の「御牧」のうち、東御市周辺には「新治牧」、「望月牧」、「塩原牧」の3つの御牧が設置され、いずれも多く良馬を産出していた。特に、北御牧地域にあった「望月牧」は、貢馬（朝廷への貢物として馬を献上すること）数が最大の牧であり、「望月の駒」として、宮廷の歌にもうたわれる名馬の産地であった。御牧原台地には「望月牧」の範囲を示す「野馬除（馬の逃亡を防ぐ土塁）」跡が点在している。

また、東御市周辺では、望月、新治などの官牧（国有的牧場）だけでなく、私牧（私有の牧場）も経営されており、馬飼勢力が在地の土豪として大きく成長していき、その中から、海野氏・祢津氏・望月氏という豪族が成長していった。この三氏は、本姓を滋野と称し、「滋野一族」とも呼ばれている。滋野一族は、相互に同族的な共同体意識を持ち、かつ古くから馬の飼育養成に関わり、弓馬の道にも卓越していたため、信濃武士団の中核として、中世の幕開けにめざましい活躍を見せることとなる。

なお、馬の飼育と共に大陸より伝えられた登り窯は、北御牧地域（御牧原・八重原両台地）にて43基の窯跡が確認されており、特に八重原台地には24基もの登り窯跡が存在し、上田の信濃国分寺の屋根瓦も生産していたと言われており、奈良時代から平安時代にかけて、一大窯業地帯であった。



写真：野馬除



図：市内の野馬除位置図



写真：西峰古窯（復元）

② 荘園化の進展

平安時代に入り、公地公民制度が次第に崩れ、各地で荘園が増えてくると、東御市周辺においても、在地の豪族による中央貴族や寺社への寄進が行われるようになった。その中で、海野地域に土着し勢力を強めていた海野氏は、自らの土地を、当時貴族中心の王朝国家の中で全盛を誇っていた藤原摂関家に寄進し殿下御領として、自らは荘園の荘官としての地位を得た。こうして、12世紀初頭からおよそ400年もの長きに及び、本海野を中心とした周辺の地を「海野荘」と呼ぶこととなり、海野氏は東信濃を代表する名族としてその勢力を保持していった。

現在の上田市中央にある「願行寺」は、戦国時代末に本海野から上田城下に移されたもので、藤原摂関家に所縁のあるとみられる仏像が現存し、荘園管理者である海野氏と藤原一門との繋がりを示しており、都と結びついた文化が栄えていたと考えられている。

(3) 平安時代～鎌倉時代

① 木曾義仲の挙兵

平安時代末期になり、貴族政治が乱れ、各地方に基盤を持った武士集団が力を持ち始める中、東御市周辺地域を基盤としていた海野氏・祢津氏・望月氏の滋野一族は騎馬力を誇る武士団として成長していった。滋野一族が最初に史書に現れる「保元物語」には、宇野太郎（海野太郎）、祢津神平、望月三郎の名がみられ、源義朝に属して奮戦したことが記されている。この乱を境に、時代は公家から武士の世へと移り、平家の栄華を迎えることとなる。

しかし、「平氏にあらずば人にあらず」という平氏全盛の世に対する反感から、治承4年（1180）に平清盛の横暴に異を唱える以仁王の令旨を受け、木曾義仲が旗を掲げた。この時、平安時代より藤原摂関家とのつながりのあった海野氏は参謀格として、騎馬力を誇る滋野一族を統率し、義仲方に味方した。信濃武士ら二千余騎が集結した海野荘の白鳥河原での挙兵に始まり、海野氏出身と云われる義仲の祐筆（書記官）、大夫房覚明による文才と智略もあり、日の出の勢いで上洛を果たし、平家を京の都から追放した義仲であったが、源頼朝との不和を境に、その進撃は悲運の最期に終わってしまう。



写真：白鳥河原

②幕府御家人としての滋野一族の活躍

武士団として勃興した地方勢力は、源平動乱の中で再編されていき、武士の中には大きく勢力をそがれ、御家人となれなかったものもいた。これに対し、信濃の有力勢力として頼朝に敵対する立場にあった滋野一族は、それぞれ鎌倉幕府御家人の地位を得ることとなった。

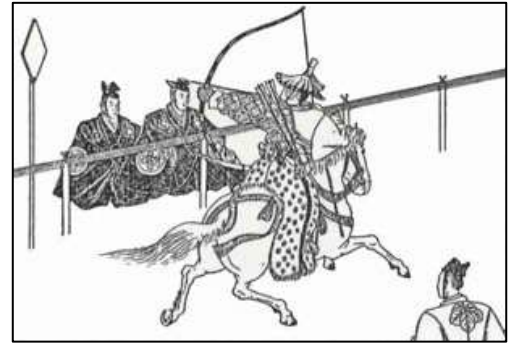
木曾義仲の参謀格を勤めていた海野氏については、不和となった頼朝への人質として鎌倉入りした義仲の嫡男義高に同行した海野幸氏が、義高の逃亡を画策するものの、その忠節と武勇が認められ御家人として重用されることとなった。また、幸氏は弓馬の達人として、鎌倉武士の中でも大いに活躍し、同じく御家人となった望月氏とともに、鶴岡八幡宮の流鏑馬射手を勤め、晩年には執権・北条時頼に弓術を指南したことが「吾妻鏡」に記されている。

なお、海野地域の北東、河岸段丘上から海善寺地域にかけては、中世から約600年にわたって隆盛した海野氏の歴史を伝える、居館跡、大手道、馬場坂、観音堂、化粧清水、家臣団の屋敷跡等の地名が、今も伝承として残っている。

祢津氏については、平安時代末より、諏訪上社の大祝家の一族となり、かつ優れた鷹匠であったことから、御家人となった後は、諏訪信仰における重要な祭儀、御射山祭の鷹狩神事を司り、重用された。

このように、滋野一族は鎌倉幕府御家人としてそれぞれ大いに活躍するとともに、所領支配については、「滋野一族」としての同族意識の強さから、一体的な支配権が成立していたと考えられている。平安時代末から鎌倉時代初期のころの海野氏・祢津氏の所領を見ると、海野を拠点に、小県から佐久郡、筑摩郡、三原（群馬の吾妻郡）にかけての広大な地域にまで及び、海野氏・祢津氏所領などと区別されるものではなく、モザイク状の支配権であったと考えられている。

また、望月氏の所領については、鹿曲川に沿った谷平野を当初の開発所領としていたが、開発可能な土地が狭いことから、続く室町時代に入ると御牧原台地の東部の八幡を、1500年を過ぎると御牧原台地東北部を包み込んで大久保、布引にまで進出していった。



図：流鏑馬



図：鷹匠

(4) 室町時代～戦国時代

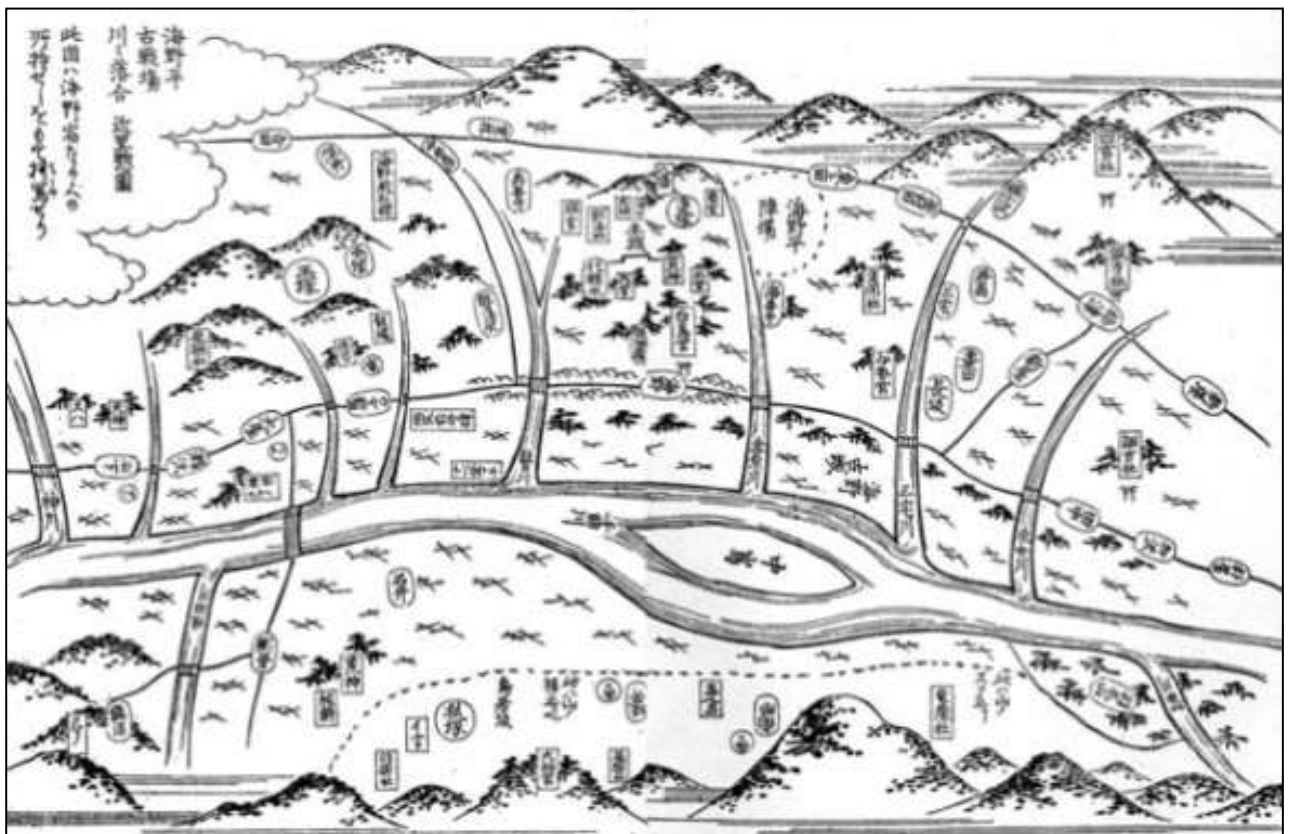
① 滋野一族の衰退

信濃は、地形が複雑なことから、大豪族の強固な勢力による支配ではなく、小豪族が群雄割拠しながら、均衡が維持されていた。その中で、東御市周辺地域は、古代より滋野一族による統治が続いていたが、元弘の変を機に鎌倉幕府が崩壊した後は、反足利尊氏側に付き敗戦したことで、室町幕府成立後は守護の統率指揮下において、その領地を維持することとなった。

しかし、応仁の乱を経て戦国時代に突入すると、甲斐の武田信虎を中心に、諏訪の諏訪頼重と坂城の村上義清が合力する形で、天文10年(1541)5月に東部地域を中心とした海野平に攻め入り、海野氏の当主海野棟綱は上州(現在の群馬県)へと逃れその地で没し、嫡男幸義は海野平の戦いで討死したため、ここに古来から続く海野氏の正統は絶えることとなる。

その後、武田氏の内紛を経て、武田信玄による信濃進攻が進められる中、北御牧地域を支配していた望月氏の当主は没落したが、その一族が武田氏の家臣となって望月領を安堵され、祢津氏は武田家と姻戚関係結び臣下となることで旧来からの所領が安堵されることとなった。

また、信玄は、自身の子や一族を派遣し、各地の名族の名跡を継がせることでその内実を武田一族が握る形で支配を広げていき、海野氏の名跡は信玄の次男竜芳に継がせ、望月氏は信玄の弟信繁の子が継いでいる。このように、滋野一族は武田氏の配下となり、戦国動乱の世において衰退することとなった。



図：海野平古戦場之図

②真田氏の活躍、祢津氏の転属、望月氏の凋落

海野平の合戦で上州へ逃れた真田幸隆は、その後武田信玄の臣下となると、信濃先方衆として戸石城攻略などで頭角を現し、武田氏勢力の拡大に大きく貢献した。

父幸隆の死に続く兄信綱の戦死により真田氏を継いだ昌幸は、武田勝頼・織田信長滅亡後の混乱の中、上杉、北条、徳川という大勢力との提携・離反を繰り返す中で、独立した大名に成りあがっていった。

そして上田築城に取りかかるが、その城下町形成にあたっては武田氏時代に既に海野にあったことが明らかな宿郷「海野町」を上田城下に移している。海野にあった海野町は小県郡では一番発達した町であったとみられる。真田昌幸は海野から開善寺・願行寺・八幡社など海野氏と関係の深い社寺も上田へ移しており、当初の上田城・城下町は海野氏の本拠地を移転したような体裁でもあった。真田氏は本姓を「滋野」と言い、海野氏の嫡流と自称していたが、それを形であらわしていたものでもある。そして海野は「本海野(もとうんの)」と呼ばれるようになった。なお、原町が原之郷から上田へ移されたのは真田昌幸の長男信之が上田城主になってからであり、また、旧真田町域から上田城下へ移された寺社は一つもない。

白鳥神社は海野(滋野)氏の祖先神を祀っているが、海野氏を継承しているとする真田氏の氏神としても祀られ、真田信之上田から松代への移封に際しては、開善寺・願行寺とともに白鳥神社も松代に建てられた。

祢津氏については、武田家滅亡後は二流に分かれた。祢津の地にとどまった祢津昌綱の系統は当初は真田氏と対抗していたが、結局その一家臣となってしまふ。一方、徳川に付いた祢津常安の系統は、上州豊岡(高崎市)で5千石、次いで1万石に加増された大名となったが、寛永3年(1626)には無嗣断絶となった。

望月氏については、望月印月齋が武田氏滅亡後の混乱期に佐久を統一した依田(芦田)氏の一家臣となる。依田氏はその後上州藤岡へ移されるが、さらに改易(断絶)処分を受けたため、望月氏のその後は不明となる。



写真：白鳥神社



写真：宮嶽山陵神社(四宮様)



写真：両羽神社

(5) 江戸時代

①江戸期の藩政

元和8年（1622）までの江戸時代初期は、小県郡一円は上田藩真田氏領、佐久郡一円は小諸藩仙石氏領と、それぞれの一郡全域が一大名領となっていた（真田氏は別に上州沼田領も）。従って東部地域は全域が上田藩領、北御牧地域は全域が小諸藩領であった。

元和8年に真田氏が上田から松代へ移され、その後小諸から仙石氏が入るが、これ以降は小県・佐久ともに所領支配は細分化されていった。東御市周辺は上田藩領・小諸藩領・祢津旗本領に分かれて、それぞれの歩みを進めることになる。

上田藩領として続いた地域は東部地域のうちほぼ西半分の地であり、その東半分の地域は小諸藩領と祢津旗本領に分かれた。また、北御牧地域はそのまま小諸藩領として続いた。

上田藩主は真田氏の後に入った仙石氏が宝永3年（1706）に移封となり、替わって入った松平氏（徳川氏の一流流藤井松平氏）による支配が明治維新にまで及んだ。なお、上田藩領は真田氏の時は小県郡全域で6万5千石、仙石氏の時は当初6万石で、のち矢沢2千石を分けて5万8千石、松平氏の時は当初5万8千石、のち塩崎5千石を分けて5万3千石であった。

小諸藩領は仙石氏の後、三代将軍家光の弟徳川忠長（甲府宰相）の支配を経て、寛永元年（1624）に松平忠憲が5万石で小諸藩主となる。忠憲は家康の異父弟康元（久松松平氏）の孫にあたるが、この時5千石を兄忠節に分けたことにより、祢津旗本領が成立した。その5千石の範囲は祢津地域の他、東部地域の一部と佐久郡の一部であり、その支配は幕末まで続いた。

小諸藩主はその後も江戸時代前期には、青山、酒井、西尾、石川氏と目まぐるしく交代したが、元禄15年（1702）に牧野氏が小諸藩主になって以降は、明治に至るまで変わらなかった。なお、牧野氏小諸藩領の拝領高（表高）は1万5千石であったが、幕府から交付された知行目録に載せられているだけでも3万石以上の実高があった。

②街道の整備と宿場の発展

社会が安定してくると、全国的な街道や流通網の整備が施されていく。大阪の陣後、徳川幕府の体制が整えられ、江戸景気ともいえる物流繁忙期となっていく。江戸整備への資材提供を課せられた各地の大名は、それぞれが物流機能の強化を必要としていた。上田領においても物資集積地の整備が必要となり、真田信之の厳命により、元和2年（1616）、海野郷の西側に海野新田が成立した。千曲川の舟運と松本、依田窪方面からの資材搬入の要として、交通の要所としての物流拠点をついたのである。移住に伴う諸条件の緩和を施し、隣接する吉田村、深井村から住民を移住させ新たな村を興した。これが西海野集落の原型である。

中山道と北陸道を結ぶ「北国街道」の通る東部地域には、慶長年間（1596～1614）に「田中宿」が、寛永2年（1625）に「海野宿」が設置されたと伝えられている。



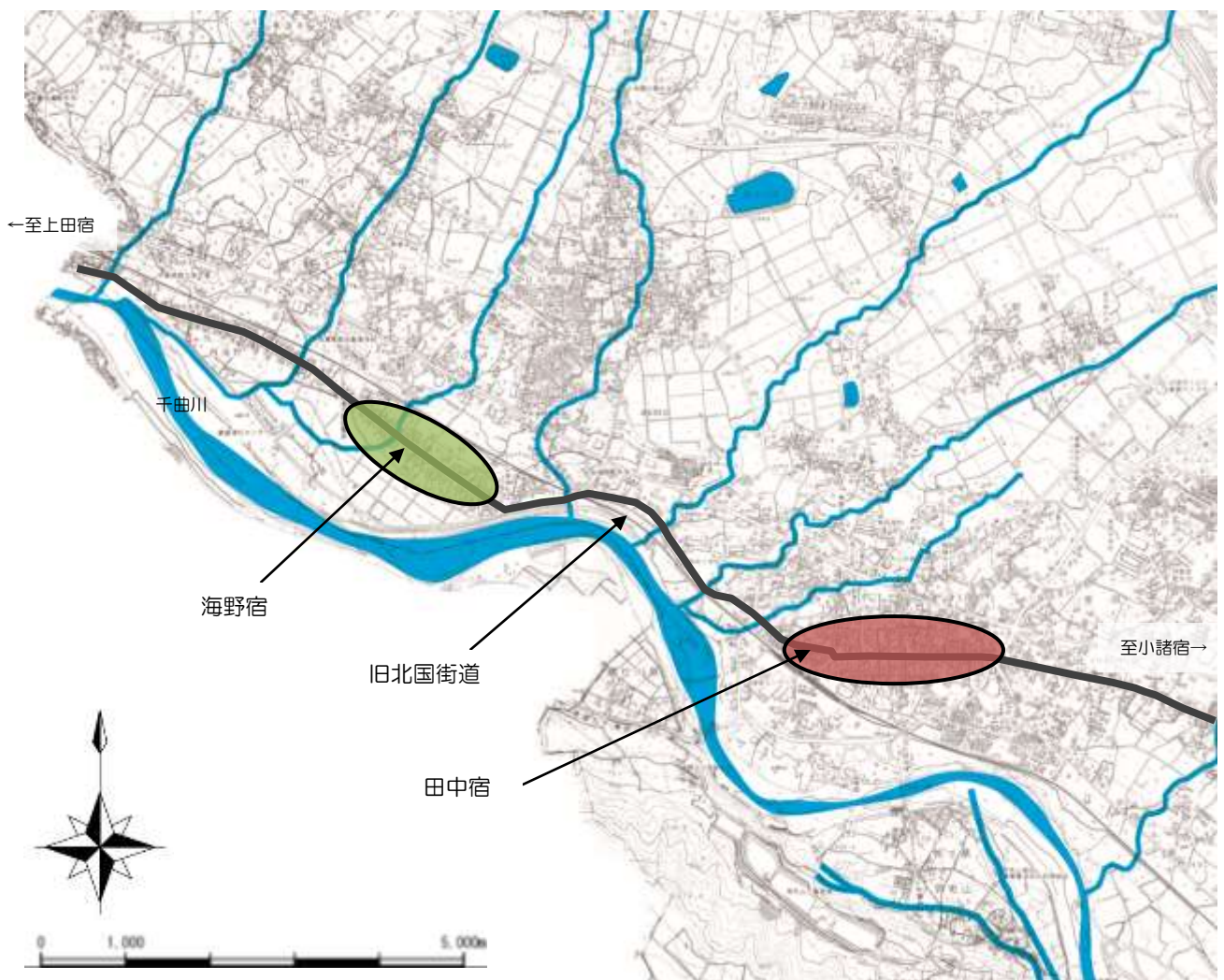
写真：田中宿本陣の門

海野宿は成立当初、田中宿の合宿的性格であつたらしく、問屋が置かれ、田中宿と半月交代で伝馬の仕事のみ務めていた。ところが寛保2年(1742)8月初頭の大洪水(烏帽子山麓から押し出した鉄砲水。戊の満水)により、本宿をつとめていた田中宿はほとんど壊滅状態となり、その被害は死者68人、負傷者58人、流失家屋119軒、残った家は29軒であつたと伝えられている。なお、田中宿北側には、大洪水の痕跡を残す林が広がっている。

これにより、本宿が田中宿から、被害の少なかった海野宿に移され、海野宿が大名の宿泊・荷物の輸送等を一手に務めるようになった。その後の宝暦11年(1761)、被害から立ち直った田中宿より、古来の通り半月交代で人馬の継立を行なうよう訴えがあり、元に戻ることに大きな支障がある海野宿との間で話し合いが行われた結果、文化4年(1807)11月に、「本陣は両宿に置き大名、旅人の宿泊は、相手方の意向次第で決めてもらうこと。伝馬役は以前の通り半月交代でつとめること」として、決着が付いたのであった。



写真：海野宿



図：北国街道と田中宿・海野宿

③旗本領に伝えられた江戸町方文化

通常、旗本領では領地内に設置された陣屋の奉行・代官によって統治が行われ、領主は江戸屋敷に居住していた。

祢津旗本領においても、領主久松松平氏は江戸湯島天神などに屋敷を構え、領地の統治は祢津陣屋を中心に進められていた。また、旗本領の支配は比較的緩やかであったことに加え、祢津旗本領においては、共有林や草刈り場を多く持っていたために、暮らしに余裕が生まれ、祇園祭や歌舞伎といった華やかな江戸町方文化を受け入れることができ、地域文化として根付くこととなった。

中でも、祢津の東町・西宮の間で行われる祇園祭では、東町・西宮のそれぞれで、担ぎ手により担がれた神輿が市中を廻った後、町境でぶつかり合い、担ぐ者と見物人とが一体となって燃え立つ様子から、かつては「けんか神輿」とも呼ばれていたように、民衆のエネルギーが噴出されていた。

その他、この地域には、7年毎に来る申と寅の年に和の田沢の美都穂（みずほ）神社と西宮の健事神社で行われる「御柱祭」や、上田小県地域の二大大日堂信仰である祢津長命寺が別当をしている「祢津の大日さま」と呼ばれる祭りなどがある。また、祢津道と呼ばれる、北国街道の裏道のような道があり、祢津道に交差して地蔵峠を越えて北上州とを結ぶ道は、湯治道として山の湯道と呼ばれていた。そこには新張を起点に一町毎に観音石像が建立され、今日では湯の丸百体観音として知られている。



写真：祇園祭



写真：東町歌舞伎保存会



写真：健事神社御柱祭



写真：百体観音石造町石

④新田開発と水争論

江戸幕府が成立し、新田開発が奨励されると、治水技術・土木技術の発達に伴い、国内の耕地面積は著しく増加していった。

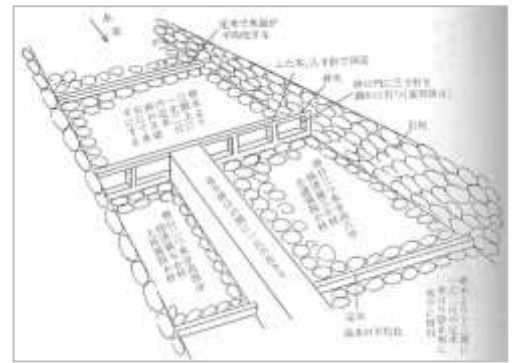
戦国期の争乱と凶作により農村が荒廃した中で、上田領においては、真田氏が農村復興に向けた百姓還往策（召し返し）を積極的に展開し、年貢諸役の負担を軽減しつつ新田開発と農民確保に取り組み、仙石氏も新田開発を積極的に進めていったことで、百姓が定住し、田地を開くようになった。

祢津旗本領においても、寛永15年～元禄7年（1638～1694）の間に、領地全体の26%が開発された。さらに、万治3年（1660）の『御家中開方之帳』によると、一般の開墾の他に家臣による開墾（家中開）も進められており、「十分ノ一地（開発された下畑のうち一部が、実面積の10分の1に換算され実際の年貢納入の負担を軽減した土地）」をはじめとした開墾奨励策により、新田開発が進められた。

しかし、東部地域の水系は、三方ヶ峰・湯の丸山・烏帽子岳などの山麓から千曲川へ南流する諸河川は、いずれも水量が少なく急流である。斜面の土質は火山灰や火山砂、火山礫などを含む泥流堆積物で形成され、水もちが悪い。しかも、年間降水量が少ないため、干害に遭いやすかった。

こうした土地条件の中で、新田開発が進むと各地で水争論が起きるようになった。中でも東部地域の中で最も水量が多く、早くから流域の開発が進められてきた所沢川水系では、上流では祢津旗本領が、下流では上田領・小諸領が新田開発を進めていた。そのため、元禄年間（1688～1703）には、奈良原水の水不足が深刻化し、新規開発や水利慣行などについて、流域の小諸領・祢津旗本領・上田領の間で度々争論が起き、水柵の設置による水の平均化、水番人の派遣、村高割による修復費用の捻出等の取り決めがなされた。また、水量が少なく用水池が多い金原川や成沢川流域では、慶長年間（1596～1614）から日割制や時間制による特色ある水利慣行が発達した。

その他、少雨地帯であったことから、吉田堰や加沢堰（権左衛門堰）などの用水堰やため池の築造、湧水などが飲料水や水田用水に利用されてきた。東部地域の片羽には、片羽・桜井地区の飲料水や水田用水となった片羽八幡清水があり、明治11年（1878）には、針ノ木沢湧水と併せて、明治天皇の接待用飲用水となったことで、御膳水と呼ばれるようになった。



図：奈良原沢分水柵構造概念図



写真：片羽八幡清水



写真：針ノ木沢湧水

北御牧地域では、小諸藩の支援・許可のもと、八重原・鹿曲川沿い・千曲川沿いにそれぞれ堰をつくることによって水を確保し、新田開発が進められていた。これらの中で、下之城堰は開削が一番早く、1600年代前半には完成していたと考えられている。それ以後、羽毛山・郷仕川原堰・島川原堰などが次々に開削されていった。

中でも黒沢加兵衛により開発された八重原新田は、台地上にあり、簡単に用水を引くことができない場所にあったものの、万治3年（1660）頃に蓼科山麓の水源を利用した約55kmに及ぶ八重原堰を開削したことで、台地を潤すことができた。

一方で、御牧原には適当な水源がなく、ため池による灌漑が中心となっている。こちらは、長い間、周囲の村々の入会山として利用され、下草などの資源の確保が非常に重要視された。江戸初期に、山元である下之城村によってわずかの土地が開墾されたあとは、開発そのものが厳しく制限されてきた。そのため、江戸後期になってからも植林すら制限され、ため池をつくり田畑を開墾するのはごくまれであった。

開発が活発になるのは、明治時代に入ってからであり、大正期までにしだいに田畑がつくられてきている。

明治時代の廃藩置県後は、小諸藩の救済事業として鳥居義文が隊長となり御牧原開発が始められた。その後、昭和37年（1962）頃に蓼科総合開発事業（県営御牧原農業水利改良事業）が完成した。この事業により水源が確保され、現在は広大な水田地帯となっている。



写真：黒沢加兵衛宅門



写真：黒沢加兵衛宅門前の八重原堰



写真：ため池（明神池）

(6) 明治時代～現在

①宿場町から養蚕・蚕種業の町への転換

幕末に横浜港が開港し、蚕種の輸出が許可され、国内だけでなく外国へも販売されるようになると、農民の副業として行われてきた蚕飼いが、蚕種製造・養蚕業として一段と普及していった。

特に海野地域においては、明治期に入り養蚕・蚕種製造が隆盛し、宿場町から養蚕・蚕種業の町へと転換していくことになるが、これに大きく貢献したのが、矢島行康（1836～1895）であった。行康は、天保7年（1836）に当宿に生まれ、安政3年（1856）に国学を志し、江戸に出て平田鉄胤の門に入り、欧米視察から帰ってきた岩倉具視の富国産業政策に共鳴し、自ら養蚕をもって貢献しようと決意したと伝えられている。副業として行われていた蚕飼いに多くの収益が見込めるようになったことに加え、こうした基盤をもとに養蚕・蚕種製造の大型化・近代化に取り組んだ行康の指導があったことにより、旅籠屋を養蚕に適するように改造したり、新たに蚕室を建てたりと、積極的に蚕種製造・養蚕に取り組むようになった。現在、海野宿の各家の屋敷裏に立ちならぶ、堅牢で壮大な総2階建ての蚕室のほとんどは、この時期に建てられたものである。また、行康により作られた4棟の蚕室のうち、現存する2棟は、いずれも保温・換気等に工夫を凝らした堅牢で荘重な建物である。

北御牧地域においても、農業生産の合間に、副業として養蚕が行われていたと考えられており、明治10年代後半には、諏訪地方で製造された生糸が北御牧地域を通り、小諸から横浜へと送られていたという。明治21年（1888）に信越線田中停車場が開業すると、北御牧地域は、周辺地域から田中停車場へと生糸を運ぶ通過地点として、大いに賑わい、望月街道の改修や橋の架け替えが行われていった。



写真：昭和時代前期の本海野



写真：種屋風景



写真：棚飼風景



写真：矢島行康記念館

②養蚕・蚕種業の衰退、産業の近代化

江戸時代に始まり、明治になって飛躍的な大型化・近代化を遂げ、大正時代にかけて発展してきた養蚕・蚕種業であったが、第二次世界大戦が激しくなる中、昭和14年（1939）の日米通商条約の破棄に始まり、戦後の食料不足の深刻化や輸出・内需不振により、受難の時代を迎えることになる。東御市周辺の養蚕・蚕種業は、廃業するものが多く出の中で続けられていったが、昭和40年代より外国産生糸が輸入されるようになると、さらに減少の一途をたどることになった。

養蚕・蚕種業が衰退していく一方で、産業の近代化が進み、農業については桑畑整理を通じてサツマイモやジャガイモの増産が進められ、戦後は開拓事業の推進や農地改革により自立農業が確立され、その後の農業生産の向上に大きく役立ってくることとなった。

東部地域においては、昭和23年（1948）の作付統制令の撤廃によりリンゴ栽培が急速に発展していった。また、養蚕に代わるものとして始められたクルミ栽培は、全国的な主産地として桑畑跡地に増殖されその栽培面積を伸ばし、多くの優良品種を生み出すとともに、現在ではクルミの生産量が日本一となっている。なお、昭和31年（1956）から巨峰の栽培も行われるようになり、特に昭和37年（1962）から栽培技術の研究や共同出荷体制の推進等により、現在では全国有数の巨峰ブドウ産地となっており、秋には「巨峰の王国まつり」が開かれている。北御牧地域においては、稲作と養蚕を中心とした農業から、園芸作物や畜産、果樹栽培など農業経営が多様化し、現在は八重原米や白土馬鈴薯（はくどばれいしょ）などが特産品となっている。

商工業については、特に工業を中心に、昭和40年代以降、農業にかわる中心産業として発展していった。

工業については、戦前は製糸工場が主になっていたが、戦後に入ると繊維、電気機械等の工場が順次市内に進出した。昭和50年代からは工業団地の造成が始まり、「羽毛田工業団地」や「上川原工業団地」、「羽毛山工業団地」が整備され、機械金属、自動車部品等の生産拠点として多くの企業が立地している。

また、商業については、戦前・戦後において賑わいの見られた商店街に加え、徐々に国道18号を中心とした主要道路沿線へも商業機能が拡大し、ガソリンスタンドや飲食店等が増加してきた。



写真：クルミ（シナノグルミ）



写真：巨峰



写真：羽毛田工業団地



写真：上川原工業団地



写真：インター東部流通団地

昭和59年(1984)に大中型店の出店凍結が解除されると、市内各地で大中型店の進出が始まり、平成10年(1998)には東部湯の丸IC周辺に「インター流通業務団地」が造成され、大型店の進出が著しくなった。

観光業について、東部地域においては、昭和34年(1959)に湯の丸観光事業の着手及び東部町観光協会が設立され、湯の丸の自然環境を活かした観光振興が進められていった。北御牧地域においては、公共福祉の湯として「御牧乃湯」が整備され、また、平成6年(1994)に黒沢加兵衛によって開拓され地域のシンボルとなっていた明神池一帯が「芸術むら公園」として整備された。その他、巨峰やクルミに代表される果樹農業や海野宿等の歴史的資源を見に多くの人々が訪れるようになっている。



写真：湯の丸高原



写真：御牧之湯

③町村合併

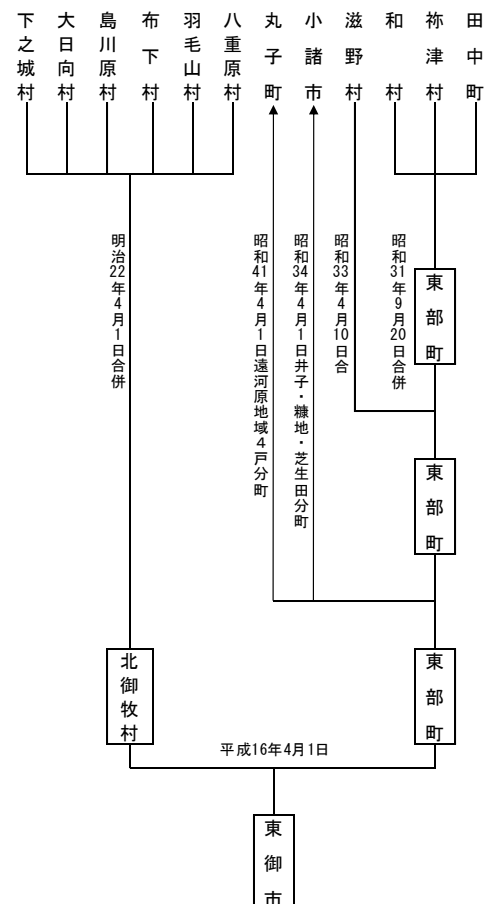
東部地域については、昭和31年(1956)9月に、田中町・祢津村・和村の1町2か村が合併して東部町が発足し、続いて昭和33年(1958)4月に滋野村が編入となった。また、昭和34年(1959)4月に、芝生田・糠地・井子の3区が小諸市へ分町し、昭和41年(1966)4月には千曲川南にあった遠河原地域の4戸が丸子町へ分町するなどの経緯を経てきた。

北御牧地域については、江戸時代から続いてきた下之城・大日向・島川原・布下・羽毛山・八重原の6つの自然村が、明治22年(1889)4月に北御牧村となった。

そして、平成16年(2004)4月に、東部町と北御牧村が合併し東御市となり、今日に至っている。



写真：芸術むら公園



図：町村合併の流れ

④まちなみ保存の機運の高まり

海野宿の北側を通る国鉄信越本線の駅が、海野宿から離れた大屋と田中の地に設置されたことや、北国街道に代わる道路として国道18号線が海野宿北方の段丘上を通ったことなどにより、海野宿は宿場町としての風情を改変することなく、さらに、ここに住む住民の建物や郷土に対する深い愛着により、町並み景観が維持されてきた。

周辺のまちなみが大きく変化していく中で、昔からの面影を色濃く残す海野宿のまちなみに対する保存の機運が高まっていき、国・県による家屋調査の後、昭和48年（1973）に町の文化財に指定されると、町によるまちなみ調査が行われ、地元では昭和55年（1980）に歴史研究会として海野宿（保存）研究会が発足し、昭和60年（1985）には海野宿審議会委員会が発足した。

さらに昭和61年（1986）には建設省により「日本の道百選」に、翌昭和62年（1987）4月には国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。その他、平成4年（1992）には「第1回美しい日本のむら景観コンテスト」で全国農業協同組合中央会長賞を受賞した。

このように、住民による積極的なまちなみ保存活動と行政の積極的な援助・助成により、まちなみの保全・修復、資料館の整備等が進められてきた。



写真：昭和時代前期の本海野



写真：「日本の道百選」記念碑